

シンポジウム

日本国際看護学会 教育活動・研修委員会企画

中国人看護師の事例から考える外国人看護師の教育支援

企画者：大植崇、吳小玉、堀込由紀、横山詞果、江角伸吾
(日本国際看護学会 教育活動・研修委員会)

司会者：吳小玉(京都光華女子大学) 堀込由紀(群馬パース大学)

令和2年度、わが国の在留外国人数は約289万人となっている。前年度からはCOVID-19により、減少しているものの、近年の推移をみると令和元年度年までは毎年過去最高を記録し年々増加してきており、今後ますます、我が国のグローバル化が進むことが予想される。そのような中、わが国では、経済連携協定(EPA: Economic Partnership Agreement)をはじめとする制度を利用して、外国人看護師が、日本の国家試験を受験し、その後、日本の病院や地域で勤務している。国際医療福祉人材育成機構からは年間平均97名の現地の資格をもつ看護師の来日を支援しているとの報告がある。特に、最近では、民間の病院で働いている中国人看護師が急増している。しかし、外国人看護師は、言葉の壁や文化などで、困難を抱えるケースが多い。加えて、看護師国家試験の合格率も低い傾向にある。この背景として、日本語の理解が不十分であることに加えて、日本の学校で十分に教育内容を理解できないなど、様々な問題が考えられる。

そこで、本シンポジウムでは、中国人の事例を通して外国人看護師の教育支援について考察するため、日本の病院に勤務している中国人看護師、教育支援者として活動している教育関係者、臨床で中国人看護師を迎え入れて教育支援をしている看護管理者の3者より話題提供していただき、よりよい外国人看護師の教育支援について議論したい。

中国人看護師の事例から考える外国人看護師の教育支援について —外国人看護師の立場から—

鄒佼佼（京都光華女子大学看護学研究科）

2008年から経済連携協定(以下、EPA)に基づき、より一層の国際化を図る観点や経済活性化の観点から、専門的・技術的分野の外国人労働者の受け入れが推進され、インドネシア、フィリピン、ベトナムの3か国から外国人看護師の受け入れが開始された。その背景と共に国際医療人材サポート機構などの民間ルートを通じて中国人看護師を日本で受け入れる流れも生まれた。日本では少子高齢化が進行し、生産年齢人口は1995年をピークに減少の一途を辿っている。中国でも同様に今後大きな高齢社会の波が押し寄せる現実がある。その他他国ではさらなる看護の発展を目指している状況がある。互いの国にとって、限られた資源の中でより良い看護を築き維持していくことは一致した課題である。しかし、EPAルートによるインドネシア・フィリピン・ベトナムからの候補生においては、言語の壁が厚く、規定年数内に日本看護師国家試験に合格できず、やむなく帰国する者が多い。EPAルートの候補生と比較し、中国は文化的つながりも濃く同じ漢字圏であるため、中国人看護師はEPAルートで就職する外国人看護師より多く日本に存在している。しかし、どちらのルートの外国人看護師も日本に適応して看護を実践する中では困難が多いのが現実である。

外国人看護師として医療現場で働く中で困難を感じた以下の4点をふまえ、自身や周囲から実際に得られた困難や悩みについて事例紹介をおこなう。具体的な事例を共有し、外国人看護師の教育支援、看護のグローバル化発展へと繋がる知見を得たい。

1. 日本の独自文化、敬語・謙譲語の存在について
日本では独自の文化があり、礼儀作法、敬語、謙譲語対応を用いた対応が求められる。その中で「暗黙の了解」も多い。それは口語的表現や所作であり、テキストなどでは学ぶことが難しい。患者、患者の家族、同僚、上司に対して、欠礼の有無を気にしながらの生活や勤務となり、実力が発揮しにくい。
2. 医療用語の略語について
日本の臨床現場では医療用語の略語がよく用いられる。その略語は病院によって異なる場合があり、テキストにもまとめられていない場合が多い。日本語学校や国家試験準備の際、略していない医療用語しか学んでないため、現場で日常的に利用されている略語の医療用語を的確に理解し、反応し、適切に動けるようになるまで時間を要する。
3. メールや電話などの通信方法を利用した報告・連絡・相談について
電話、メールを利用した連絡方法は頻度が高いが、礼儀作法に則り的確に要件を伝達しなくてはならないため、外国人看護師にとっては大変難易度が高い。
4. 緊急時対応について
急変時は緊張が生じるため、日本語で簡潔かつ具体的に状況を伝え、指示をやり取りすることが難しい。いつ訪れるかわからない急変時に対し、心理的負担が多い。

看護職を目指している留学生への看護学教育

王麗華（大東文化大学 スポーツ・健康科学部 看護学科）

キーワード: 留学生 看護教育 外国人看護師

要約:

人々の健康維持と増進のため、日本も世界中の国々と同じく自国の健康課題に向き合いながら取り組んでいる。一方国際化に伴い、看護職も国と地域間を超えた移動が増えている。日本では、2008年から経済連携協定（EPA）によって海外の看護師が来日し、国家試験に合格したうえで日本で看護師として活動することが可能となった。外国人看護師の概念について王ら(2008)は、「日本語以外の言語を母語としている人で日本の看護師資格をもち、かつ医療機関に勤務している看護師」と定義した。そこで、医療現場で外国人看護師の能力を高めるための教育支援が求められる。

未来社会に向けて看護人材を育成するには、専門職としての意識を培うことが必要である。すなわち、「社会への理解」、「看護の対象理解を含めた多様な場における看護実践」、「看護探求」を遂行し、看護の質を向上につなげる。そのため、看護師を目指している留学生に、日本の地域社会文化への理解を含め、看護職の活動の場を理解する機会を提供し支援する。また、実習や国家試験対策などへの支援も重視する。さらに、日本の医療機関での活動を視野に、看護分野における外国人留学生への教育支援に取り組む。これらの取組は、日本の看護教育をうけ日本で看護実践する外国人看護師を、国際的な優れた人材に育て、より良い保健・福祉・医療の実現につながると考える。

引用・参考:

- 1) 王麗華 ほか: 病院に勤務する外国人看護師の看護業務に関するコミュニケーションの課題に関する研究 群馬パース大学紀要 2008; (7): 71-78.
- 2) 落合佳子 ほか: カリキュラム改訂前後の在宅看護学実習における看護技術実施状況の比較検討 日本看護学教育学会誌 2019;28 (2), 1-10.
- 3) 王麗華・磯山優:外国人留学生の看護実践能力の育成に向けた教育組織づくり. 大東文化大学紀要. 自然科学 2021;59 21-27.

プロフィール

おうれいか
王麗華

1990年中国天津から来日。国際医療福祉大保健学部看護学科卒業。看護師・健師資格取得後、病院と訪問看護ステーション勤務。博士課程修了(医学博士)後、国際医療福祉大学看護准教授などを経て、2018年より現職。

当院における中国人看護師の教育支援の現状と今後の課題

小坂晶巳（社会医療法人財団慈泉会 相澤病院副院長 看護部部长）

【中国人看護師育成の経緯】

社会医療法人財団慈泉会相澤病院(以下、当院)は、長野県松本市にあり、今年で 114 年の歴史をもつ病床数 460 床の急性期病院である。当院における中国人看護師の育成は、1995 年に松本市と河北省廊坊市が友好都市関係を結んだことに始まる。2002 年に、5 名の廊坊市出身の中国人看護師候補生が日本の看護学校に入学し、2005 年 4 月には、日本の看護師国家資格を持つ中国人看護師が当院へ就職した。そして、2022 年 4 月現在、9 名の中国人看護師が当院で就労している。

【当院での中国人看護師教育支援の現状】

当院は、これまでに約 30 名の中国人看護師を育成してきたが、中国人看護師用の看護師教育プログラムは特に設定していない。その理由は、来日後、日本語学校や看護学校の教育課程及び、日本語検定 N1 認定と看護師国家資格の取得を経ているため、当院で看護師として就労するためのコミュニケーション能力や文章作成能力を持ち合わせていると考えているからである。しかし、実際には、日本人看護師より時間をかけて教育を行っており、これまでほとんどの中国人看護師は、成長のペースに差はあるものの日本人看護師と大きな違いはなく成長している。この状況は、本人達の能力の高さや、努力に支えられていると考える。

【育成が困難な場合の対応】

現場から中国人看護師の看護業務遂行が難しいと相談を受けた場合、ケースによっては部署異動を判断する。その背景には、主にコミュニケーションエラーが存在する。たとえば看護師間のコミュニケーションの行き違いや、口調がきついことによる患者とのトラブル、そして教育担当者の疲弊感の高まりなどが挙げられる。実際に配属部署を変更し、それに伴い看護業務の幅を狭めて患者との接点を少なくし、看護補助業務を含めた業務に従事させて困難を乗り越えたことがある。その間は、面談を繰り返し行い、業務チェックリストなどを用いて業務の習得を支援した。

【今後の展望】

育成が困難な状況に陥ると、中国人看護師及び教育担当者の双方が疲弊した状態に陥りかねない。また、人材活用の視点から見ても非効率である。中国は漢字圏であることから、日本語の文字は馴染みやすいだろうが、日本語でのコミュニケーションは難しいと改めて感じている。実際の看護業務の遂行には、医療用語を加えた日本語でのコミュニケーション能力、文章作成能力が必須であり、本人の並大抵の努力では達成できないレベルにあると考える。今後は、中国人看護師の自己努力に依存せず、日本語学習の機会を設定するなど何らかのサポート体制が必要である。